日本語読本に関する文章論的一考察

蒲　谷　　宏

1.

本稿は，日本語教育における「文字理解」—読解—のための教材である「日本語読本」に関し，文章論的に考察したものである．

日本語読本は，基本的に，日本語で書かれた実際の様々な種類の文章が読めるようになるという，「読む」ことの最終目標に至るまでの橋渡しとしての役割をもっている．原則的には教科書もその役割を担うものであり，また，読本も文字表現や音声表現・理解に発展させられないわけではないが，やはり読本のもつ中心的役割は読解にあるといえよう．

日本語読本は，学習者の目的に応じてある特定の分野の文章だけを集めることもできるだろうが，一般的にはいくつかの分野からの文章により構成されている．ただしここで問題となるのは，その題材，内容の点から，文章が採り上げられることが多い点である．

これは様々な学習者の要請に応えることから，編集上已むを得ないことではあるが，日本語教育の立場からは，文章自体の構成や展開の点から考えていく必要があるといえる．日本語の文章表現の型，リズムなどに慣れ，表現内容，表現主体の表現意図，主張などを的確に把握できるようにすることが，日本語教育における文章読解指導の目的となるからである．

もちろん，文章表現を，その内容と表現自体とに截然と分離することなど不可能だが，文単位での文法教育と同様，文章の型—理解主体として文章を読み進めていく際に捉えられる文章の展開上の様々な型—に着目することは重要だと考えられる．

また，難易の点を考えると，読む主体の立場からすれば，叙述内容の展開の追いやすいものが易しい文章であり，途中で何度も立ち止まらなければならないものは難しい文章となる．ここで立ち止まるというのは，語句の意味，文の理解で躓いているというだけでなく，文章自体が立ち止まることを要求してくるものである．つまり，読む主体に考えさせ，より深い理解を求める文章であり，そこには表現主体の主体的立場の表現が多く見られる文章である．これについては，後で触れたいと思うが，日本語読本の初級，中級，上級といった難易度もこのような点から決められるかと思う．

日本語読本を教材として扱うためには，そこに採り上げられた文章がどのような文章であるのかを，まず明らかにしておく必要がある．ここではそのほんの一端を考察するにすぎないが，まず接続語句の使用度から，次に主語，文末表現の点から，みていくことにしたい．

2.

まず，その文章の性格を特徴づける一つの重要なマークと考えられる接続語句(いわゆる接続詞，副詞，連語などを含む．ただし今回の調査では接続助詞は除いた．）についてみていきたい．

2.1.

接続語句は，連接する語，句，文，文段の関係を顕在化させたものと考えられ，文章表現の展開上，重要な役割を果たしている．それだけに読解の際にも重要なものとなるのだが，接続語句の役割を単純に過大視することも危険である．語，句，文，文段などの連接関係は，本来，接続語句がなくとも成立するものであり，文章の流れを重視すれば接続語句が省略されることも容易にありうるからである．

しかし，それにもかかわらず，否そうであるからこそ，接続語句が多用される文章とそうでない文章とは，その表現主体の表現態度，表現素材などに何らかの相違があると認めなければならない．接続語句が多用される

文章は，連接関係を明確にしようとする，あるいはしなければならない文章であり，接続語句があまり用いられない文章は，連接の関係が自ら明瞭なものか，あるいは叙述内容の流れを重視する文章であるといえよう．

もっとも，同じく接続語句といっても，その中で特に，反覆，例示，説明，要約などを示す接続語句(言い換えれば，たとえば，すなわち，つまり，要するに，など．これらを換言系接続語句とよぶことにする.）に注目したいと思う．これらの接続語句は，先に述べた，読み手を立ち止まらせるものであり，これらが用いられている文章というのは，結果的に理解者を考慮してわかりやすく叙述内容を表わすという点に特色がある[1]．

もちろん，これだけを特別扱いすることには問題があるが，展開，反対，転換の接続語句だけが用いられている文章とは性格を異にすることだけは明らかであろう．

2.2.

そこで次に，「日本語読本」所収の文章の，接続語句使用状況を示しておきたいと思う．使用した資料は，

『外国人のための日本語読本』初級，中級(文化庁)

『日本語読本　中級』(早稲田大学語学教育研究所編)[2]

である．

なお，表の数値は，接続語句が何文で1回用いられているかを示したものであり，数値が高くなるほど使用頻度は低くなることを表わしている．

—は，接続語句が1例も用いられていないこと，また＊は，換言系接続語句が1例も用いられていないことを示す．(大きく，換言系接続語句とその他の接続語句とに分けて考えると，その使用状況は，1. 換・多，他・多 2. 換・多，他・少 3. 換・少，他・多 4. 換・少，他・少，のように

---

1) 拙稿「文章内における言い換えについて—接続語句による言い換えを中心に—」(『国文学研究』第85集)

2) 北條淳子氏「中級読解教材における接続詞の問題」(『講座　日本語教育』第16分冊)に詳しい．

表 1

		文化庁　初級読本	文数 / 接続語句数
1	1	水のたび	24.0*
	2	東京タワー　「小学国語 4 年上」	6.0*
	3	つる	7.0*
2	1	小さなねじ　八波則吉「はなしのはなたば」	3.4*
	2	東海道	—
	3	京都で	5.7*
3	1	貝づか	3.0
	2	寺子屋	6.7*
	3	日本のむかしばなし　1, 2, 3	—, 5.0, 9.0*
	4	年中行事と信仰	4.1*
4	1	パン　古川清行「社会科なぜなぜ教室 4 年」	2.8*
	2	魚の感覚　末広恭雄「小学校国語 5 年上」	3.1
	3	製紙工場の見学「小学国語 5 年 1」	6.9*
5	1	日本にはなぜ木で造った家が多いか「小学国語 3 年下」	2.5*
	2	えんとつ　「小学国語 3 年 2」	4.0*
	3	数を足す話　矢野健太郎「子どもに聞かせたいとっておきの話」	3.4
	4	ひこうき雲　「小学国語 4 年 2」	6.8*
6	1	お金のあな　古川清行「社会科なぜなぜ教室 4 年」	2.4
	2	日本人の祖先	2.7*
	3	日本人の名字　古川清行「社会科なぜなぜ教室 6 年」	1.5
7	1	算数の問題を作る　「新国語 5 年上」	5.3*
	2	農具の今とむかし　「小学国語 4 年上」	4.8*
	3	日本の国土	2.7*
	4	ゆたかなくらし　大来佐武郎「少年少女学習百科全集 日本の産業」	5.0*

なる．接続語句全体の使用頻度は，1, 2, 3 が高く，4 が低いということになるが，それだけでは文章の性質が異なると考えられる 1,2 と 3 との相違が示せなくなってしまうため，ここでは，3 の中，最もその傾向の顕著な換の使用例 0 の場合に * を付したのである．したがって * が付されているのは，3, 4 ということになる．）

まず，接続語句があまり用いられていない文章からみていくことにす

表 2

		文化庁　中級読本	文数 / 接続語句数
1	1	煙のゆくえ　立花太郎「小学新国語 6 年上」	3.8
	2	学科の問題　矢野健太郎「新編新しい国語中学 2 年」	3.6*
	3	生物のいる星といない星　鈴木敬信「中学校国語 1」	4.8
	4	科学的なものの考え方　矢野健太郎「数学ノートブック」	1.6
2	1	生きていた化石　「小学国語 5 年 1」	4.8*
	2	栄養と水産　杉浦保吉「南の魚，北の魚」	10.6*
	3	におい　吉田昭作，牧野賢治「世界を変える現代化学」	6.8*
	4	光の速さ　金原寿郎「なぜでしょう科学質問箱第 1 集」	5.2*
3	1	海の底　「小学新国語 5 年上」	3.5*
	2	科学者の道　「小学校国語 5 年下」	3.7*
	3	コンパスと定規だけの数学　大矢真一「ピタゴラスから電子計算機まで」	3.8
	4	ゼロの発見　吉田洋一「小学国語 6 年 2」	2.9
4	1	日本の民主主義のあゆみ　美濃部亮吉「少年少女学習百科全集 3 社会のしくみ」	2.7
	2	憲法と基本的人権　「あたらしい憲法のはなし」(文部省)	4.3
	3	内閣と政府　美濃部亮吉「少年少女学習百科全集 3 社会のしくみ」	6.5
5	1	資本主義のあゆみ　大来佐武郎「少年少女学習百科全集 4 日本の産業」	2.0
	2	私たちのくらし　「私たちの働きとくらし」	2.7
	3	生産のしくみ　同上	2.4
6	1	花を追う人々　秋山ちえ子「私の社会見学」	5.6
	2	墓から見た古代の日本　岩村忍「日本少国民文庫 4」	2.8
	3	新聞とその読み方　荒垣秀雄「新聞編集の魔術」	4.6
	4	物言いについて　桑原武夫「現代日本文化の反省」	4.0
7	1	めくらになった名僧	6.4*
	2	命をかけて　「小学国語 6 年上」	31.3*
	3	天下一の馬　豊島与志雄「現代日本文学全集少年文学集」	4.1
8	1	四季 1,2,3,4 荒垣秀雄「天声人語」	—, 6.8*. —, 24.0*
	2	古いものと新しいもの　古田紹欽「禅」	5.7
	3	祭り	5.0
9	1	日本語と封建性　金田一春彦「日本語の表現」	5.9
	2	敬語	5.3
	3	心の小径　金田一京助	11.6*

表 3

	語研　中級読本	文数/接続語句数
1	留学生日記	22.3
2	あいづち　池田摩耶子「日本語再発見」	7.8
3	地震の予知　坪井忠二「中等新国語二」	3.0
4	なぞの贈り物　星新一「ちぐはぐな部品」	13.5*
5	われわれはなぜ話さないか　加藤秀俊「ことばで考える」	3.8
6	立つ　梅棹忠夫ほか「日本人の生活空間」	9.6
7	城への道　中村真一郎「近代文学選」	7.3*
8	日本人の名前　池田摩耶子「日本語再発見」	14.0
9	魔神　星新一「ちぐはぐな部品」	12.3
10	いじらしい国家　山崎正和「混沌からの表現」	3.8
11	雷おふくろ　佐藤愛子「娘と私の部屋」	13.7
12	ことばのあそび　川本茂雄「ことばの色彩」	8.0
13	在京近況　朝日新聞	18.5
14	子どものしつけ　増田光吉「アメリカの家族・日本の家族」	2.7
15	夏は雲　池田彌三郎「町っ子　土地っ子　銀座っ子」	5.3
16	栄養不足と偏食　河野友美「たべものと日本人」	4.2
17	自分がある，自分がない　土居健郎「『甘え』の構造」	1.8
18	どろぼうのこと　芥川也寸志「出会ったこと，忘れ得ぬこと 4」	31.0*
19	月三万円の贈り物　加藤秀俊「習俗の社会学」	3.4
20	ゆとりの社会作りへ　朝日新聞「座標」	14.2*
21	水　佐多稲子「近代文学選」	9.9*
22	母の像　雑誌「子どものしあわせ」	6.3
23	大学と社会の接点　千石保「比較サラリーマン論」	5.7
24	ことばと文化　鈴木孝夫	4.2
25	棒　安部公房「現代文学選」	4.3
26	適応の条件　中根千枝	3.4
27	切り抜き帳　遠藤周作「現代の快人物」	8.7
28	「対して」と「から」の循環　加藤周一「雑種文化」	2.8

る．数値が 10.0 以下のものを取り上げると，文化庁初級では，1・1*，文化庁中級では，2・2*，7・2*，8・1・4*，9・3*，語研中級では，1，4*，8，9，11，13，18*，20*，となる．

これらは，小説 (7・2, 4, 9), 随筆 (9・3, 11, 18), 新聞 (8・1・4, 13, 20), 日記 (1) などが多くなっている．これらの文章は，基本的に叙述内容の流れを重視する文章であるため，それを妨げる接続語句の使用は控えられる傾向にあるといえよう．また新聞などではスペースの制限上，連接関係が明瞭な際には接続語句が用いられないといえる．

なお，文化庁初級で 10.0 以上の文章が少ない理由として，全般的に文数が少ないこと，すると，そして，また，などの接続語句が多く用いられていることがあげられる．接続語句が用いられていても，それがすぐ論理的な文章，説明的な文章には結びつかないのである．

このことは，*で示した換言系接続語句が 1 例も用いられていないという点とも関連する．文化庁初級では * が多くなっているのである．また文化庁中級の表から，接続語句があまり用いられていない文章には，換言系接続語句も用いられていないことがわかる．

次に，接続語句が多く用いられている文章として，数値 3.0 以下の文章を取り上げると，文化庁初級では，3・1, 5・1*, 6・1, 6・2*, 6・3, 7・3*，文化庁中級では，1・4, 3・4, 4・1, 5・1, 5・2, 5・3, 6・2, 語研中級では，3, 14, 17, 28, となる．

これらはほとんどが説明文，解説文である．換言系接続語句の使用状況との関連をみても，文化庁初級でこそ使用例 0 のものが見出せるが，(これは先に述べた理由による．しかしここではむしろ，換言系接続語句が使用されている数少ない文章がここに集中していることのほうに注目したい．ちなみに，ここには入らなかった 4・2 が 3.1, 5・3 が 3.4 といずれも数値が低くなっている.) 文化庁中級，語研中級では，いずれも換言系接続語句が使用されている．(用例数は，文化庁中級 1・4 から順に，5, 5, 3, 2, 5, 2, 1, 3, 9, 3, 2 となっている.) 立ち止まる文章と，そうでない文章との違いが，こうしたことにも表われているといえよう．

3.

以上，接続語句の使用頻度と文章の性格との関連をみてきたが，次に，主語と文末表現の観点からみていくことにする．

3.1.

永野賢氏は，文章論の大きな柱として，連接論，連鎖論，統括論を立てられ，さらに連鎖論の中では，主語の連鎖，陳述の連鎖，主要語句の連鎖という点から文章構造の解明を試みておられる[3]．

ここでは，この連鎖論の中の，主語の連鎖，陳述の連鎖という観点に倣って，文章の性格を考えていきたいと思う．

まず主語のほうだが，永野氏の分類に従うと，

「は」の主語＝主題主語，「が」の主語＝主格主語

「は」の主語の文＝判断文，「が」の主語の文＝現象文

「は」の主語の省略された文＝準判断文，無主語の文＝述語文

となる．また判断文は必要に応じて，述語が「――である」あるいは「用言現在形」のものを判断文㊀(ここでは I)，主語が既出の語または現前の事物で形作られ述部が用言のものを判断文㊁(ここでは II) に分けられる．

また陳述のほうは，辞に関する分類の中，「態度による分類」として，

客体的事象の叙述〔た(過去)，ている，ない(動詞の打消)など〕

主体的立場の陳述〔だ，だろう，らしい，た(確認)，のだ，など〕

読み手への働きかけ〔か，かしら，ね，だろう(同意を求める)など〕

という三分類がなされている．

また，客体的事象の叙述を表わす文末をもつ文が総文数に対して占める割合を「叙述率」，主体的立場を表わす文末をもつ文が総文数に対して占める割合を「陳述率」として文章分析がなされることもある．

3.2.

以上の分類を利用して，表にしたのが表4である．（なお，ここでの叙

---

3) 以下，永野賢氏『文章論総説』(朝倉書店，1986) に拠る．

表 4

			主題主語				主格主語	無主語	客体的事象の陳述	主体的立場の陳述	読み手への働きかけ
			判断文			準判断文	現象文	述語文	叙述率	陳述率	
				I	II						
初 A	2	2	58.8	11.1	88.9	0	41.2	0	92.9	7.1	0
	1	1	33.3	14.3	85.7	25.0	41.7	0	91.7	8.3	0
B	6	3	85.7	50.0	50.0	4.8	9.5	0	57.1	42.9	0
	6	1	62.5	54.5	45.5	0	29.2	8.3	57.9	36.8	5.3
	5	1	55.2	53.8	46.2	0	44.8	0	40.0	53.3	6.7
	7	3	57.5	44.4	55.6	0	42.5	0	56.3	43.8	0
	4	2	51.7	28.6	71.4	12.1	31.0	5.2	62.0	22.0	16.0
	3	1	61.1	50.0	50.0	16.7	16.7	5.5	53.3	46.7	0
中 A	8	1-1	43.5	0	100.0	0	56.5	0	75.0	25.0	0
		-2	62.5	66.7	33.3	0	31.25	6.25	70.3	29.7	0
		-3	65.8	38.5	61.5	2.6	31.6	0	65.2	34.8	0
		-4	55.0	60.0	40.0	0	35.0	10.0	79.2	20.8	0
B	1	4	70.3	39.3	60.7	3.4	25.8	0.5	63.6	31.4	5.0
	5	2	58.5	66.7	33.3	0	36.8	4.7	59.2	38.8	2.0

述率，陳述率は，です．ますを消去し，だ・である調の文末形式により算出した．です・ますを残すとすべてが主体的立場の陳述の文末形式になってしまうためである．）

ここでの目的は，特定の文章の性格を個別的に明らかにすることではなく，それぞれの文章の相対的な特色を示すことにあるため，先に調査した接続語句の使用状況との関連をもたせ，使用頻度の低いものを A，高いものを B として，それらの相互関係を考察することにした．数値はすべて百分率で示し，原則として小数点以下第2位を四捨五入した．

3.2.1.

まず，文化庁初級から取り上げた文章についてみていくことにする．

A の2・2は，東京から京都までの旅行中の描写が中心となっており，会話によって進められている．（ここでは，地の文だけを調査の対象とした.）1・1は，水が木の葉の上から海に出るまでの様子が描かれている．2・2，1・1は，主題主語，主格主語の比率（1・1に準判断文が多いのは，水である「わたし」を主語とする文が続くため），文末表現の比率ともに酷以しているが，それは両者の表現方法が類以していることに起因する．

叙述率が高いということについて，永野氏は，「自分の行動も他の人物の行動も，起こった出来事も，できるだけ客観的に述べようという姿勢・態度で貫こうとしたために，客体的事象の叙述の文が多く連続している，ということである.」[4] と述べておられる．

以上の A に対して，接続語句の使用頻度の高い B の6・3をみると，主題主語の割合が高くなっており，文末の陳述率も高くなっている．

陳述率が高いということについて，永野氏は，「主体的立場の陳述の文末を多く含むということであり，それは，事情の説明であったり，自己の情感の強調であったり，もろもろの判断であったり，言ってみれば，作者がひんぱんに顔を出すということである.」[4] と述べておられる．6・3は，

4) 永野賢氏，前掲 p. 293『伊豆の踊子』の分析をされている．

日本人の名字についての史的な説明文であるが，事実を述べるとともに，それに対する表現主体の推測が入り込むため，陳述率も上がったと考えられる．

6・1は6・3と同じ著者によるもので，昔の銅貨になぜ穴があいているかということの説明文である．述語文が，金貨や銀貨の定義をするときや，主語を一般化しているときに用いられている．また，読み手への働きかけは，「なぜ四角な穴があいているのでしょう.」という形で表現され，続いてそれに対し「それは銅貨の造りかたに原因があるのです.」と答えている．このような，課題文型と解答文型の呼応によるものを，永野氏は「課題解答方式」と名づけておられる．

5・1は，典型的な課題解答方式で，「なぜ木で造った家が多いのでしょうか.」という課題に対し，「その大きな理由は...ということです.」「...入れやすいのです.」「...多いのです.」「...少ないのです.」という解答の文を，以下の段落の最後に置いている．

また，判断文についてみると，6・1，5・1は，2・2，1・1が判断文 II が多くなっているのに対して，判断文 I の比率が高くなっている．これは判断文 I が，題目を提示したものについての解答，説明をするといった典型的な判断文であるのに対し，判断文 II は，より現象文に近いという性格があることと関連する．判断文，現象文の比率は2・2と5・1ではほぼ同じ数値であるが，判断文 I，II の比率の違いが，それぞれの文章の性格の違いを表わしているといえよう．5・1，7・3は現象文の比率が高いが，これは事実を示すことにより説明していくという叙述をするためであるといえる．7・3は判断文 I，II に関しては，6・1，5・1に比べ I の割合がやや少ないが，2・2，1・1とは明らかに性格が異なることは先に述べたとおりである．

陳述率については，説明文である5・1，7・3はかなり高くなっている．

次に3・1であるが，これも典型的な説明文である．4・2は同じく説明文ではあるが，判断文 II も多く，叙述率が B の他の文章に比べ高くな

っている．4・2は「魚の」感覚についての説明文であり，同じ説明型の文章であっても，説明部分に客観的な事象が多くなると，当然文末もそれに呼応し，叙述率が高まると考えられる．しかも4・2は読み手への働きかけも多く，それに対する説明としては，説得力をもたせるために客観性の高い事象を示していくことになるのである．

以上，A,B の数値の違いは，そのまま典型的な描写型と説明型の違いに対応しているものといえよう．

接続語句が多く用いられるというのは，説明するためには論旨を明確にしなければならないという意識が強く働くためであるならば，そうした表現主体の意識が，主語や文末表現にも及んでくるということができる．

3.2.2.

以上，初級の文章についてみてきたわけだが，次に文化庁中級から A, B，それぞれ特徴のある文章を取り上げ考察していきたいと思う．

まず A として，8・1の天声人語からの4つの文章を取り上げた．これは同じ人の手によるものであり，文章の形式も同じものであるため，基本的に大きな差が出るはずもないのだが，8・1・2には接続語句が用いられているという点が，若干文章の性格の違いを示し，それが判断文 II の比率の高さにつながる (8・1・3との相違点)とみられる．これは，8・1・2に，日本には植物の種類が多いことの客観的説明がなされている部分であるため，それが反映しているのである．説明文を含みながら陳述率が低いのもその理由からである．

次に B として，接続語句の使用頻度の最も高い1・4を取り上げた．これは，科学的なものの見方，考え方とはどういうことかについて，語りかける調子で述べてある文章(講演体)である．質的にも量的にも(121文)初級の文章と比べて難度が高く，連接の点でも複雑になってきているけれども，数値からみると，初級の B で述べてきたことがそのまま当てはまり，典型的な説明型の文章であることがわかる．

実際に読み進めるときには，問題点を読み手に呼びかけ，客観的事象を

「また」でつなげながら述べた後，「つまり」でまとめ，「しかし」で主体的立場の表現をしていく，といったこの文章の基本的な展開の型が捉えられれば，それほど難しくないと思われる．表現内容に振りまわされないことが重要ではないだろうか．

また，換言系接続語句が多用されている文章として，5・2を取り上げた．これは生活のしかたの基本的なしくみについて書かれた説明文であるが，基本的な性格は，これまでに述べてきたことと同様である．

ただしここで一つ注意しておきたいのは，4つの述語文である．それらは，1，財貨，経済財，自由財，2，消費財，生産財，3，生活水準，4，エンゲル係数，について「～を～という」という形で定義している文である．内容を把握することが目的の文章においては，このような定義づけの文となっている述語文の役割は大きいといえよう．

以上，中級の文章についてみてきたが，A, B の関係，数値の比率など，初級とほぼ同様に考えられる．

そこで，以上2, 3において述べてきたことを，簡単にまとめると次のようになる．

接続語句使用頻度一低 → 主格主語比率一高 → 叙述率一高＝描写型
(A)
＼
高 → 主題主語比率一高 → 陳述率一高＝説明型
(B)（特に判断文 I）

ただし，それぞれの文章は相互に関連しあい，描写型の文章に説明型の文章が混入すること，あるいはその逆も当然ありうる．

4.

以上，大まかにではあるが，接続語句，主語，文末表現の点から，いくつかの文章を考察してきたが，最後に読解のための文章としてどのようなものを採り上げ，どのように配列していけばよいのかということについて

述べておきたいと思う.

読み手の立場で文章を大きく分けると，叙述内容が大切な文章と，表現主体の考え方，主張などが大切な文章とになる．前者のように情報を受けることが目的の文章には，主体的立場の表現は相対的に少なくなることが予想されるため，表現自体は平易になるといえる．逆に後者は，内容自体の難しさよりも，主体的立場の陳述が多くなることによる表現の難解さが生じてくるといえよう.

これらの文章をいずれも採り上げ，易から難へという配列を考えると，単純には，内容・易，表現・易→内容・難，表現・易→内容・易，表現・難→内容・難，表現・難，という順序になる．ただし，内容・易，表現・易は学習者の興味をひかないであろうし，内容・難，表現・難の文章は，中級程度の教材としては不適当である．そこで，内容を重視する際にはできるだけ表現を易しくし(客観的事象の叙述を多くするなど文末の簡略化)，表現主体を重視する際には内容を易しくする(使用語句の制限，平易化)ということになる．当然，文の長さ，文章の長さも考慮する必要があろう.

はじめに述べたように，表現と内容は不可分のものであり，最終目標は実際の生の文章を読むことなのであるから，あまり文章に手を加えてしまうことは好ましくないといえるが，生の教材を導入する前段階においては何らかの形で日本語の文章表現の特徴そのものを取り上げ，指導しておく必要があると思われる．その際，文章論的な観点による分析が役立つことが予想される.

ここでは，ごく大まかな文章の相対的特徴を確認するにとどまったが，今後は，個々の文章の分析をさらに進めることにより，より良い日本語読本，日本語教材を作成していくことを，課題としたいと思う.